

またいつかきつと助産婦に！

山崎 裕恵

厚生連廣島総合病院(広島県)

私を紹介して下さった笠松愛子さんとは、桶谷乳房管理研修センター第19期生で顔を合せ、6か月間同じアパートで寝食を共にした間柄です。苦しかった研修生時代には持ち前の明るさで随分助けられました。時折宮城県から電話が入ります。「元気かい？」で始まり「そうかい、そんなもんだ、ワッハハハ」で終わります。ほっとするのです。彼女のことなら書き尽くせぬ程のエピソードがあるのですが、私を紹介するにあたり、いろいろ暴露されるのではないかと心配していたのでこの辺りにしておきます。

事実は小説よりも奇なり。総婦長室では実にさまざまなことが起こり、その対処に追われる毎日ですがそれはさておき、これまで自分が辿ってきた道を振り返ってみることにしました。

准看護婦教育に携って

私はかつて、2年課程900名近くの学生を抱えるマンモス学校で母性看護学と実習指導を担当していました。今から15年前の花の30代まっただなかの頃です。日本看護協会では准看護婦制度廃止運動を久しく続けており少し抵抗感がありましたが、教員たちは「学生間のレベルの差の大きい中で、限られた時間内に少しでも良い教育を」をモットーとし、制度が存続している以上最大限努力するという姿勢をつらぬきました。

在職中最も思い出深いことがあります。やはり准看護婦教育は廃止すべきとの論点から、校長、担当理事と何度も話し合いが進められ、学生、医師会員双方の諸事情を考慮して、定時制4年課程とし、順次准看護学生募集を減らし4年後に一本化するという計画案ができました。医師会員の合

意を得るため総会が開かれましたが、議論の末、首脳部の考え方とは裏腹に、却下という最悪の結果となりました。その時我々教員はどんなにかがっかりしたことか。今でも解決しない制度改革が、あの時全国に先駆けて行なわれていればと残念なりません。

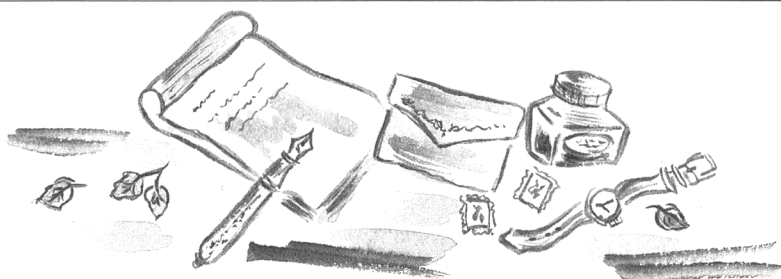
その頃より臨床で教育を考えたく、また、本来の助産婦業務に戻りたく思い、以前より誘われていたこともあって思い切って臨床へ戻ることにしました。4年間学生と共に歩んだ教員生活は悲喜こもごもでしたが、看護教育に携ったことはその後の業務に非常にプラスとなっています。次の職場は宮島の赤い鳥居がかすかに見える厚生連廣島総合病院。ベッド数430床、地域の中核病院です。

久しぶりの助産婦業務

約10年ぶりの産婦人科病棟はとても新鮮で活気にあふれていました。何しろ赴任した日がこの病院に入る2度目で右も左もわからず、しかも責任者である病棟婦長としての採用でしたから、採用した方もされた方も大冒険です。助産婦業務に就きたい一心で恐さ知らず、恥知らず、聞いて、歩いて、失敗しての毎日で、周囲はハラハラしどおしの大変な思いであつたろうと察せられます。3か月経ってやっといろいろ動けるようになり、スタッフの気心も知れてゆとりが出てきました。

産婦人科病棟は病床数28床、分娩数月45件。婦人科もあり慢性的なベッド不足の中、よいお産、よい看護を目指してスタッフ一同積極的にいろんなことに取り組みました。

継続看護が問われはじめた頃、私たちは母乳育児確立に向けて試行錯誤していました。そんなと



き、9月号に登場した助産婦学校の同級生、平田きよみさんが、福岡で桶谷式母乳育児相談室「おっぱい110番」を開設し、開業助産婦として活動を始めました。見学し、講習会に参加し、同級生のよしみもあって遠慮なくアドバイスを受けました。ピュッ、ピュッと出るおっぱい、気持ち良さそうにマッサージを受けているお母さん、説得力がありました。赤く緊満し飲めない陥没乳頭を前に手も足も出ない私たち。こんな相談室が私たちの病院にあったらどんなにお母さんたちに喜ばれるだろう、とそればかり考えるようになりました。

病棟婦長から総婦長へ

彼女のように桶谷そとみ先生の指導を受けたい、どうしたら実現するだろう、と思案の頃、突然打診もなく私に総婦長の辞令が下りました。患者さんとその役職にある方に大変失礼な言葉ですが、学生の頃から「癌と総婦長にだけは……」と聞かされていたし、そんな大役を私が、などと悩む中で、組織の力の大きさを痛感させられました。大好きな助産婦・看護婦業務から離れることは身を切られる程のつらさで、しかもやり残した母乳育児相談室開設の夢が果たせぬ無念さを胸に、5年間の病棟勤務を終えました。

母乳育児相談室開設に向けて

総婦長になって無我夢中の1年目、新しいことに挑戦するのが好きな院長と事務長、もちろん産婦人科部長のバックアップを受けて、桶谷乳房管理研修センターへ研修生を1名派遣することになりました。これから退職の可能性が少なく、30歳以上で、6か月間の研修が可能なこと等の諸条件

をクリアできる人を探したのですが、対象者はすべて単身赴任できず、結局急拠私が行くことになりました。病院の方は心配ありませんでしたが、今までさんざん迷惑をかけた夫や子供達は……いや何とか3人で頑張ってくれるだろう、と深く考える暇もなく、あわただしく車に荷物を積み込んで大阪へ向かいました。

研修センターでは桶谷先生の指導で素晴らしい技術を身につけることができました。そして、センターで出会った、実家が広島という藤原照美さんに一緒に頑張ろうと猛アタック、やっと勧誘に成功し、逆に彼女の両親から感謝されました。あと半年勉強するという彼女に開設準備をしておくことと約束し、6か月の研修を終えました。

あれから5年、母乳育児相談室は毎日予約でいっぱい、なくてはならない存在となりました。私は管理の仕事で思うようにタッチできませんが、藤原さんが病棟スタッフと共に頑張っています。

何ごとによらず、何かことを始めようとするとき必ず抵抗、障害に会います。しかし専門性を発揮して最大限努力すれば必ず道は開け、実績は評価されます。私はそれが認められるこの病院が好きなのです。

さまざまなドラマが展開される助産婦業務、もう一度携りたい思いはつのる一方ですが、またいつかきっと助産婦に！その願いが叶う日を夢みて管理業務に専念しています。

* * *

次回は九州大学助産婦学校の恩師、古賀千鶴子先生をご紹介します。私は迷惑をかけた1人で先生の前に出ると小さくなっています。長い教員時代のお話や近況報告を楽しみにしています。